

コラム64：英国のワンちゃん（2018年7月）

この旅もカミサンとのこんな会話から始まりました。
「一度ヨーロッパに行って見たいな。まだ行ったことないモンね」
「ヨーロッパの何処へ行きたいんや？」
「どこでもいいんじゃないけどね。イギリスなんかどうかねえ」
「イギリスはモノスゴイ遠いど。金も時間もかかるけえ、止めといた方がええ」
「それなんだけどね。ちょうどイイ感じのプランを見つけたんよ」
（そう言って、私の前に旅行社のカタログをドサリ）
「なんや、もう下調べが出来とるんかい！」
どうもウチのカミサンの「どこか遠くへ行きたい病」が今年も始まったようすな。
それからいろいろとスッタモンダがありまして一結局、私達が参加したのはH旅行社の
「憧れのイギリス6日間 添乗員付き」（6月22日から6月27日）というプラン。



6日間と言っても、滞在は実質4日間だけで、行きと帰りの2日間は飛行機の中ですね。遠方でしかも短期間で廻るといことで、当然ハードなスケジュールになるわけです。広島空港から出発して、上海まで2時間、それから約11時間の飛行でロンドンに入ったのですが、搭乗や入国、乗り換えの時間を含めると、空港と機内に片道20時間位は居たことになります。現地に着いたら、バスに乗ってまた移動して、大して興味がなくても一応下りて、添乗員さんの持っている黄色い旗を目印に、後ろにゾロゾロと着いて観光するわけですよ。「ノーキョウのお年寄りの団体サーン」という感じでカッコ悪いし、「ホンマにシンドイばかりで、ワシは行きたくなかったんですよ！」



以前のツアー旅行で知り合ったFさん夫婦は、去年の夏にイギリスに行ったそうです。従兄さん夫婦と4人で、レンタカーと列車を使って移動して、宿はネットで予約して、道路や駐車場、レストランやトイレまでチェックして2週間かけて廻ったと聞きました。私とほぼ同年輩の方ですが、＜これってスゴくないですか？＞

帰国された後で、話を聞く機会がありましたが、いろいろと失敗もハプニングもあったようです。それがまた貴重な「旅の思い出」になるんですね。自分の意志と主体性のある「自由な旅」、こういうのが本物の旅行ではないですかね。非常にウラヤマシク思いましたが、今の私達には、それだけのことをする時間も技量も環境もありません。しかし、その時に聞いた旅の話が、今回の「英国の旅」のツアーに参加する「布石」になったことは確かですね。

今回の旅行に出発する前に、ひそかに考えていたことがありました。宮殿なんぞはどうでもいいから、イヌの写真をイッパイ撮ってやろう、と思ったのです。中国やベトナムでも少しやりました。しかし、実際に来て見ると、あまりイヌに出会わない上に、「いい被写体」に出会った時に

カメラを向けることにタメライがでるんですね。

「もしかして怒られるんじゃないか」とか、思うのです。

今はいろいろと「個人情報」とか「肖像権」とか、いいますからね。そんなモヤモヤが一気に吹っ飛んだのが、ロンドンから西に 200km の位置にあるコッツウォルズ地方の、ボートン・オン・ザ・ウォーター Bourton-on-the-Water に来た時です。

別名「リトル・ベニス」と呼ばれている、英国の古い街並みを残している美しい村です。村の中央に流れる 浅瀬の川には古いアーチ状の石橋が架かり、川沿いには豊かに茂る緑の木々とハチミツ色の石造りのカフェやショップ、民家が並んでいます。川辺に広がる 緑地帯では、老若男女、家族、カップル、友人など三々五々、話して、食べて、寝そべって、くつろいでいます。川岸では多くの人が足を川の中に浸して涼を楽しんでいますね。この風景にはどこかで見覚えがありますね……そう、それはまるで、中学校の美術教科書にあった、古い印象派の絵画のようであったのですよ。



そして、この「楽園」では沢山のワンちゃんが、ヒトといっしょに「幸福なひと時」をすごしていたのです。次々と目の前に現れる、魅力的なワンちゃんと嬉しそうな飼い主たちを見て、私はごく自然に、ためらうことなくカメラを向けました。バシャバシャと写真を撮っても、誰も文句など言わないどころか、みんな笑ってくれるんですね。いきなりカメラを向けるわけですから、中には戸惑った表情の飼い主もいますが、ワンちゃんを撮ったあとで、「Nice dog!」(いい犬だね！)とか、「Very cute!」(とってもカワイイね！)とか言ってあげると、喜んで許してくれるんですよ。

そりゃそうですよ。自分の飼っている「自慢のイヌ」の写真を撮られて、ウレシくないわけないのです。みんな「わが子が一番」と思っているのですからね。不思議なことに、ワンちゃんたちも嬉しそうに視線を合わしてくれるんです。

ここでは、ヒトもイヌもリラックスして、心を解放しているんでしょうね。

<そうか！これが英国人の至福の時というヤツか！> なんとなく私は納得しましたね。

私は3年前に「コラム45:犬の気持ち」の中で、「英国では、犬は人間に従属する動物という考えが定着しているらしい」と書きました。ここでの彼らの接し方を見ても、ヒトとイヌが別な生き物であることを認識して、少し距離をおきながら仲良く共存しているという感じなんですね。イヌを「擬人化」して、服を着せたり、赤子のようにダッコして一といった日本人のような接し方はしていないようです。国民性の違いでしょうかね。



私が今回撮ったワンちゃんのNo.1は、大型のブルドッグ。コイツはリードも付けずに、自由に走り廻っていたのです。川に飛び込んで、投げ込まれた棒を咥えると、それを岸辺の主人まで届けるという「お遊び」を、嬉々として繰り返していましたね。疲れて休息している「彼」に、私がカメラを向けて近づくと、＜何の用じゃい！＞と言いたげにギロリと一瞥。吠えるでもなく怯えるでもなく、微動だにしないで、視線を合わせてポーズをとりましたね。大したもんです。自信満々という感じですな。



彼って誰かに似てるといませんか？

英国の国民的英雄、ウインストン・チャーチル卿ですよ！

今回の旅の前、イギリスに行く行かないで、スッタモンダしている時に、カミサンとこんな会話がありました。

「ワシは宮殿とか遺跡とかに興味がないけえ、お前一人で行って来いや」

「一人で行ってもツマランもん」

「はいじゃあ、誰か友達をさそったらエエじゃないか」

「そんなこと言っても、すぐに、いっしょに行ってくれるような人はオランのよ」

「どうしてそんなにイギリスに行きたいんよ？」

「ワタシはベリーちゃんの人形を買って帰りたいのよ！」

＜コーギーのヌイグルミを買うためにイギリスへ？＞

……信じがたいことですが、彼女は本当にそう言ったのですよ。



しかし、現地にいってみると、こんなに簡単なことが、意外に難しかったのですね。オックスフォードやブレナム宮殿、コッツウォルズなどの観光地、そんな所にある土産店や工芸店などを、フリーの時間を使って、くまなくさがしてみたのですが、コーギーの人形などないのです。そして旅の4日目に入って、ロンドン市内観光の時のこと。現地ガイドさんが、バスの中でこんな案内をしたのです。

「あそこに見えるのが、イギリスで有名なオモチャのデパートのハムリーズ Hamleysですよ」

思わず二人とも身を乗り出しましたね。

＜あそこに行けばあるに違いない＞ そう考えたのです。

問題はどうやってそこへ行くか、ということです。団体ツアーでは、途中で抜けて個人行動というのは難しいのですね。ホテルに帰ってから、地下鉄やタクシーで行くという方法もありましたが、時間的に遅くなると店が閉まる可能性もありました。そんなことを二人で話していると、大英博物館やローズガーデンを見たあとで、バスは市内の中心部へ向かいました。そして夕食の時間まで少し余裕があるということで、1時間のフリータイムになったのですよ。

しかもバスを下ろされたのが、「ピカデリーサーカス」というロンドンの繁華街中心部。東京で言えば、銀座4丁目という感じですかね。そして、現地ガイドさんに聞くと、「ハムリーズなら、ここから近いですよ。あそこの通りに沿って行けば、10分位で着きます」という返事。本当にラッキーな巡りあわせでしたね。



フリータイムという限られた時間ですから、二人で懸命に歩きました。そして、歩きながら、
「くたかがイヌのヌイグルミのために、何でこんなことをしとるんじゃろか」という思いがよぎりましたよ。
カミサン「人形さがし」に付き合っているうちに、こっちまでオカシクなっていたんですな。
必死に歩いたおかげで、5分程度で着きましたね。広い賑やかなバス通りに面した、真っ赤な装飾の店構えで、すぐにわかりました。店内に入るといきなり、ブンブンと天井を飛び回るオモチャの実演会場。広い店内の壁面には、様々な人形やオモチャの陳列棚。しばらく二人で探したものの、「こりゃ見つかるのは大変だわ」ということになりました。

「お店の人に聞いた方がイイと思うよ」

「またワシかいの！誰にきいたらエエんじゃろうか？」

「あの人、店の人だよ」

カミサンが、指さす方向には、黒いシルクハットに赤いえんぴ服—奇抜な服装の男性が立っています。どう見てもお客ではありませんな。しかし、何と聞けばいいのか。

＜ヌイグルミは英語でなんだっけ？そうか！人形(Doll)でいいんだ＞

「Excuse me ,Do you have dog's doll ,Welsh Corgi Pembroke ?」

(すみませんが、コーギーの人形ありますか？)

すると、彼はニコリ笑って、＜ちょっとここで待ってくれ＞という素振り。

＜ヨカッタ！ワシの英語が本場で通じた＞ ドヤ顔で喜んでいると、まもなく彼が戻って、自分に付いてくるように手招きします。



彼の指さす棚の下を見ると、そこにはコーギーのヌイグルミが一杯！
ヤレヤレ、やっと見つけましたよ。

コーギーにしては優しい顔で、スヌーピーに似た雰囲気ですな。

カミサン曰く。

「これはコーギーでもメスの顔よね。顔がキツくないもの」

さすが女王様のイヌらしく、王冠をかぶってマントまでしていますね。価格の方は税込で£ 21 (21 ポンド)、日本円で計算すると、1 ポンドが 150 円位ですから、3150 円ですか。安いという価格ではないですが、これを目的にイギリスまでやってきたカミサンにとって、値段など問題外なのです。あとは混雑しているレジコーナーへ行って支払を済まし、コーギー人形のゲット記念写真など撮って店外へ。真っ直ぐに集合場所のピカデリーサーカスへ戻りました。やれやれ、これで今回の旅行の目的は達成しました。気持ちよく日本に帰れますな。



ここで私たちは「大きな失敗」をしていることに気づきませんでした。
それは帰国して、この店をネット検索してみて、初めて知ったのですよ。
私達が行ったハムリーズ Hamleys は、1760 年の創業。日本で言えば江戸時代中期ですかね。
世界で最古にして、世界で一番有名な玩具店、それも本店であったのですよ。私達が見たのは、
英国でいう所の地下1階(英国では the ground floor)で、その上に5階の売り場があって、模型や
ゲームなどのいろんなオモチャがあったらしいのです。買う、買わないは別として、ちょっと上の階
を見てみればよかったですよ。世界一の玩具店まで行って、入り口の所を覗いてみて、人形一つ
だけ買って帰った、というのはもったいないことをしたと思いますね。

旅の最後は、ウィンザー城観光。ここは王室の別邸になるんですね。一か月前にヘンリー王子の
結婚式があったこともあって、大変な数の観光客。私達は宮殿内の観光はそこそこにして売店へ
向います。やっぱり、ありましたよ！ここはコーギーのヌイグルミが「テンコ盛り」の世界でした。
腐るものではないですが、こんなに置いて大丈夫？と思うくらいあるんですね。女王様が飼ってい
るからと言って、専売特許というわけでもないでしょうがね。お値段の方は、£ 19 (2850 円位)で、
意外に安い気がします。



カミサン曰く「このコーギーはオスの顔よね」
なるほど言われてみれば、ハムリーズのは優しいカワイイ感じですが、
こちらは男性的で凛々しい感じがすな。モデルは、女王様に飼われ
ていると言われる五匹のコーギーの、どれかなんでしょうね。
帰ってから、二匹のコーギーを並べて写真を撮ってみると、顔が
歴然と違います。カミサンの言うように、まさにオスとメスという感じで、
王冠は女性の方が似合いますな。



今回の英国の旅で出会ったイヌのことで、少し気になることがありました。あれだけ沢山のワン
ちゃんに出会ったのに、ウチの「ベリーちゃん」と同じ「ウェリッシュ・コーギー・ペンブロープ」を一度
も見なかったのですよ。英国産の犬種ですから、こちらに来ればワンサカいると思ったんですがね。
そういえば、出会ったワンちゃんたちは圧倒的に大型種が多かったですね。コリー、レトリバー、
そして大型のテリア種ですね。コーギーはエリザベス女王が飼っていることで有名ですが、現在の
英国では人気種ではないのでしょうか。

不思議に思ってネット検索してみると、意外なことがわかりました。コーギーは「断尾」(幼時に
シッポを切ること)という習慣に、愛護団体の反発があるとか、椎間板ヘルニアとか変形性脊髄症
などの病気が出やすいという体質をもっているらしいのです。それゆえ、現在は非常に減少して
おり、イギリス国内では絶滅の危機にあるのだそうです。こんな愛くるしい犬種が、カワイソな
状態のようです。ワンちゃんに罪はないんですが、ヒトとイヌの付き合い方というのは難しいもんで
すね。

連日の猛暑日でヒトも大変ですが、イヌもシンドイようです。特にコーギーのような牧羊犬は、ダブルコートといって二重に毛皮を羽織った構造になっていますから、寒さには滅法強いですが、暑いのはツラそうです。だからといって、クーラーの部屋に閉じ込めるのもよくないですから、このところ毎日のように庭で水浴をしています。私達と「ベリーちゃん」との関係も、今回の「ヌイグルミ捜し」の顛末でお分かりのように、少し過熱ぎみですね。一番大切なことは、ヒトとイヌの双方が幸福になること。私は英国式に、クールな付き合いの方がイイと思うのですが……。



冷たい水の中に体を沈めてボンヤリと空を見上げ、すこし経つと水槽から出て、芝生に仰向けに転がって甲羅干しをする。そんなことを何度も繰り返しています。彼女は一体どんなことを想って、水に浸かっているんですかね。ご先祖さんの生まれた、英国ウェールズ地方の牧場の夢でも見ているのでしょうか。



「ナーンも期待せんで、しょうがなしに出かけた旅じゃったが、帰ってみると
いろんな思い出を作っとるもんよのう」

◎「英国の旅」についてのコラムは三部作になります。
次回は英国の花事情について書きたいと思います。